

ポルトガルのギター。
 ヴィオラ・カンパニーサ(上左)
 ヴィオラ・トゥエイラ(上右)(標本番号H237192)
 ギターラ・デ・リスボア(下)(標本番号H237191)



はっちゃんぶんちゃん
 (別府・竹瓦温泉)

はっちゃんが
 愛用していたギター

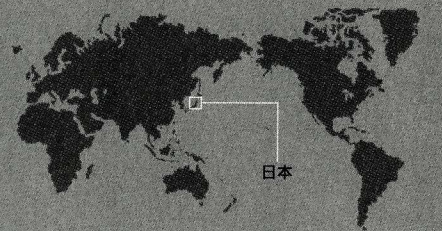
ギターに刻まれた歴史

地球を
 集める

笹原 亮二

(さはら りょうじ)

本館民族文化研究部



先日、一本のギターの寄贈を受けた。それは大分弾き込まれたクラシック・ギターで、ボディの至るところに大小たくさんの傷がある。サウンド・ホール付近はピックで削れて木肌が露出し、ガム・テープを貼って更なる摩耗を防いでいる。ブリッジにはピックを付けた紐がガム・テープで貼り付けられ、ボディの縁もガム・テープで補修してある。ヘッドの大きな割れ目は接着剤をたっぷり塗って補修され、ネックの側面には紙片を貼り付けてポジション・マークを自作している。ネックの根元とボディ尾部にねじ込まれた金具には、少々くたびれたストラップが付いている。

とまあそんな具合で、このギター、何ともいえない雰囲気を感じ出している。

別府の流し

このギターは、別府温泉の流しのギター弾きの「はっちゃん」(上野初さん)が長年愛用してきたものである。彼は現在も、アコーディオンの「ぶんちゃん」(日浦文明さん)とコンビを組んで、月二回おこなわれる地元NPO竹瓦温泉倶楽部主催のイベント「竹瓦・夜の路地裏散歩」で演奏を披露している。

はっちゃんは一九二六年広島に生まれ、幼いころに両親と共に別府に移り住んだ。その後、満州に渡り、しばらく働いた後に軍隊に入隊した。終戦後は三年間のシベリア

一時は警察の肝いりで「別府メロディアンズ防犯協会」を組織し、六組編成で毎晩飲屋街の隅から隅まで演奏して歩くほど隆盛を誇った別府の流しも、現在、現役は彼ら二人のみとなった。

記された文字

はっちゃんのギターを改めて見てみると、前述のような、別府の流しの人びとが経験してきたこの数十年のあいだの暮らしが、各所に刻み込まれていることに気付く。ギターに付いた大きさままな傷は、屋外の演奏で雨に濡れたり、狭い飲屋のなかで柱や壁にぶつかったりという、流しならではの演奏の様相を伝えている。手製の紙のポジション・マークも、急なリクエストや客の伴奏の際のキーの変更に威力を発揮したのではないだろうか。

はっちゃんのギターには、そうした別府という地域で生きてきた人びとの小さな歴史と同時に、もう少し大きな歴史の流れも影を落としている。二〇世紀初頭にマンダリンとともにヨーロッパから日本に移入されたギターは、一九二〇年代末に古賀政男によって、浪曲や三味線をベースに大衆的な流行歌謡にとり入れられた。戦後それは、演歌や歌謡曲のギターの演奏に受け継がれ、日本の大衆的なギターの受容として定着していった。はっちゃんのギターには田端義男のサインと「古賀メロディ」

抑留を経て帰国、別府に戻った。戻ってから、土木作業員やタクシー運転手などさまざまな仕事を経て、一九五〇年代中ごろから流しでギターを弾き始めた。ギターは、最初にほんの少し経験者から手解きを受けたが、ほとんど独学でマスターした。

かつて別府の流しは、ギター二人にアコーディオン一人の三人一組で、一人が歌うというかたちで演奏していた。組ごとに飲屋街でめぐる範囲が決まっていた、そこを演奏しながらめぐり、声が掛かると店に入って曲を演奏した。もちろん客のリクエストにも応じた。はっちゃんは、流しを始めて間もないころはリクエストされても弾けないこともあり、そんなときは悔しくて、家に帰ってから、寝ている家族を起こさないように、布団を被って必死で練習したという。そんな彼のレパートリーは数千曲にもおよんでいる。

一九八〇年代にカラオケが登場すると、彼らが歌や演奏を聞かせるのではなく、客の歌の伴奏をするようになった。カラオケ機器を備える店も増えて、次第に流しの仕事が減っていった。その一方で、温泉ホテルの宴会に呼ばれるようになった。一晩に何カ所も掛けもちするほど忙しいときもあり、流しの仕事の減少が相殺されて収入を確保することができた。その後、カラオケの普及や温泉地に対する人びとの嗜好の変化などで、彼らの演奏の需要は更に減少していった。

の文字が見える。彼は田端義男も古賀政男も大好きで、彼のレパートリーは、大部分を彼らの歌を初めとした演歌が占めている。ギターに記されたそれらの文字は、彼のギターと演奏が、日本におけるポピュラー音楽や大衆文化の歴史と密接な関係を有していることを示している。

日本のギター、 ユーラシアのギター

今回のギターの収集は、人間文化研究機構の連携研究「ユーラシアと日本：交流と表象」の一環でおこなったものである。このプロジェクトでは、一昨年ポルトガルのギターに関する資料収集をおこなった。ここでは六弦ではない多様なギターが各地で見られ、同じ大衆的なギターの受容・定着の様相とはいえず、別府の流しとは大きく違っていた。両者のギターの受容・定着の違いをユーラシアという視点から眺めると、それが、ユーラシア西端のポルトガルと東端の日本がそれぞれ経てきた歴史の違いといかにかかわっているのかといった、更に大きな問題も浮かび上がってくる。

たかがギターと侮るなかれ。目を凝らせば、ギターをめぐるさまざまな歴史をそこから読みとることが出来る。

因みに、はっちゃんのギターと演奏は、現在準備中の、民博の新しい音楽展示で紹介する予定である。